

大学「改革」あれこれ（２）

最近なにかとランキングをつけるのが流行っているが、大学も例外でない。いろいろな指標で大学を「評価」し、トップからの順位づけをした雑誌の特集が目につく。国立大学が法人化されて何年か経つが、とにかく競争的・外部資金をどれだけ取ってくるか、「カネの取れる研究」がますます重視されてきている。法人化した本学も、予算が毎年カットされるなかで同様の傾向がみられる（もちろん外部資金獲得は重要課題だが）

人文社会学部のような学部は、医学・薬学、そして経済学部などと違って、一見してわかりにくく、カネは取りにくい学部だ。短大・教養の改組で誕生した学部に対して、当初から「評価」はあまり高くないようだが、このところ「改革」の標的にされてきている。12年でやっと「味」が出てきて、内外からの評価も高まってきたのに、「改革」「改革」という声が増しに強くなっている。もちろん学部・学科を充実し、発展させる

「改革」は必要だが、「改革」自体を目的とするようなことがあってはならない。外部評価や学生などの意見を取り入れて、カリキュラムなど学部・学科の



改革に努めてきた。その成果が12年目を迎え「開花」しつつある。

私が研究科長・学部長のときに実施した評価専門委員会による外部評価においても、ある委員から次のような総評をもらっている。「大都市名古屋の公立大学として、『グローバルな視点とローカルな視点を併せもち』という姿勢が貫かれている。とくに、学部学生および社会人学生に対して、そのような視点をもって地域社会で活躍できる人材に育成することが追求されており、完成年度を迎えるにあたって大学当局としての責任が十分果たされているといえる。」

なにより大切なのは、「学部学科再編ありき」ではなく、現状をシビアに点検し課題を明らかにして、一丸となって教育研究の充実に努めることではないか。

（2008年9月29日 記）